

古代インドにおける銘文を持つ貨幣の出現時期とその文字と言語について

—Allan(1936)のカタログによる—

吉池孝一

1. はじめに

古代文字資料館には古代インドの、銘文の無い貨幣がある。マウリヤ朝のものであろうか。縦 11.55mm・横 14.26mm (図1のNo.4の図像により仮に縦横をこのようにする)、厚さ 2.35mm、重さ 3.27g、材質は銀と思われる。^{オモテ}表と^{ウラ}裏の画像の色が異なるのは撮影の条件が異なるため。大きさが異なるように見えるのは表裏で端の削れ具合が異なるためである。



図1. 古代インドの方形銀貨 (吉池撮影)

この貨幣の表には5種の打刻印がある。打刻器で刻印を打ち出しており「打刻印貨幣 (パンチマクト・コイン)」と呼ばれる¹。裏にも小さな刻印が幾つかある²。グプタ, P.L. 著・山崎元一他訳(2001:10;もと1969)の「第2章 インドの初期貨幣」に「これらの初期貨幣の打刻印の図柄に銘はない。その図柄は様々な形の丘、木、鳥、動物、爬虫類、人間、植物、幾何学模様や、宗教的シンボルなどからなっている。」とあり、次いで「第3章 異民族支配の貨幣」でギリシア語とインド語が併用された貨幣が紹介される。このような章立

¹ グプタ, P.L. 著/山崎元一他訳(2001:10;もと1969)参照。

² 中央左に渦巻状の刻印、その右隣に正方形の枠組みがあり縦線が明瞭に残っている。その下には極小の正方形、中央右端に楕円の中に「く」の字の刻印がある。中央上には3つの●のようなものがあるが傷であるか刻印であるか判断が難しい。この裏面の小さな刻印について、グプタ, P.L. 著/山崎元一他訳(2001;もと1969)には次のようにある。「はじめ貨幣には片面だけに図柄あるいはマークが刻印されていた。こちらの面を便宜上「表」と呼ぶならば、もう一方の面あるいは「裏」は空白のままであった。時がたつにつれ、裏側の面もまた、これらの小さなマークを刻むために使われるようになった。これらの小さなマークは造幣所のものではなく、流通している間にときどき刻まれたのである。」(10頁)。

てと記述から、異民族支配の前の段階の貨幣はマークを打刻した貨幣であり銘文は無いとの漠然とした印象をもっていた。問題は異民族支配の貨幣が出る前、いつ頃から銘文を持つ貨幣が出始めるのか、それがどのような文字と言語によるものかということである。この点について Allan(1936) *Catalogue of the Coins of Ancient India*. に掲載された貨幣の画像と説明により確認をする。Allan(1936) というカタログの範囲内での確認であるが概略は知り得よう。

2. Allan(1936)

Allan(1936) は、939 種の古代インドの貨幣の画像を当該書の末尾に添付する。Allan(1936) の本文では、各貨幣の刻印と銘文の模写を利用して、次のように五つに分類し解説を付す。

I : Various Early Single Type Silver Coins

27 種の銀貨を「NORTHE-WEST INDIA」「NORTH INDIA」などの大きな地域に分ける。方形貨幣と円形貨幣を主とするが、それ以外の形の貨幣もある。銘文は無く、1~2 種の打刻印よりなる。

II : Silver Punch-marked Coins

205 種の銀貨を 5 つのマークの組合せで分類する。その分類が地理によるものか時代によるものか明示し得ないようである。方形貨幣、円形貨幣を主とするが、それ以外の形の貨幣もある。銘文は無い。

先の図 1 の貨幣は、Allan(1936) が分類した II 中の「グループ 8 の b」(52 頁) に相当する。その 5 種のマークは次ぎのとおりである。なお、No.5 とした動物が小動物をくわえている刻印は、図 1 の貨幣では分かりにくいのが頭部が下方を向いている。

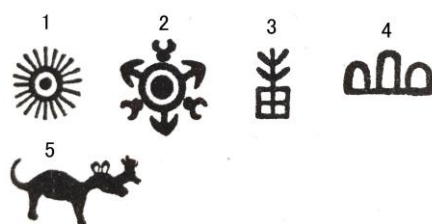


図 2. 打刻印 5 種 (Allan1936 より引用 数字は吉池による)

III : Uninscribed Cast Copper Coins

26 種の鑄造の銅貨。方形のもの 19 種、円形のもの 7 種。鑄造のためであろうか細部が不明瞭でどのようなマークか確認するのは困難である。これにより鑄造による貨幣もあることを知り得る。

IV : Cast And Punch-marked Copper Coins

31 種の鑄造と打刻の銅貨。鑄造銅貨は 10 種で全て円形。打刻銅貨は 21 種で全て方形。銘文は無い。北インドで発見されるという。

V : Tribal Coins

650 種の貨幣。銘文を含む。銘文に記された国名・地域名などによって分類されている。
‘Tribal Coins (部族貨幣)’ と称するのは便宜であるという。国名および地域名の後に紀元前 3 世紀から紀元後 4 世紀初頭までの年代が記入されているので、Allan(1936)の記述に信を置くならば、いつ頃にどのような銘文が出たかを知ることができる。

3. 紀元前 3 世紀のインドの銘文を持つ貨幣

Allan(1936)が分類した V により、紀元前 3 世紀とされる銘文を持つ貨幣を、国名および地域名とともに抜き出すと下記①②③の 3 つとなる。これをもって、古代インドにおける銘文を持つ貨幣の最早期の銘文を見ることができそうである。

Allan(1936)の書籍の体例を確認すると次のとおりである。当該書の末尾に貨幣の画像が添付されており本文の内容と紐づけされている。本文では、銘文や刻印の模写を利用して、その共通点により貨幣を幾つかに分類する。下記の①によって例示すると、分類された諸貨幣の初頭には「Eran」「Dharmapāla」「Third Century B.C.」とある。これは Allan 氏の判断である。その後にブラーフミー文字によるインド語の銘文がローマ字翻字に翻字されて dhamapālasa とある。Allan 氏は各種の情報に依り初頭の「Eran」「Dharmapāla」「Third Century B.C.」を記すわけである。「Eran」については国名もしくは地名とする。「Dharmapāla」は銘文「dhamapālasa」の主格形である。これについては特段の記述はないので、国名・地名であるのか、それとも王名・人名であるかは別の観点から推測しなければならない。

①ブラーフミー文字インド語で dhamapālasa とある貨幣

貨幣の画像は末尾にある「PLATES」の 18(XVIII)頁の 6 に収められている。

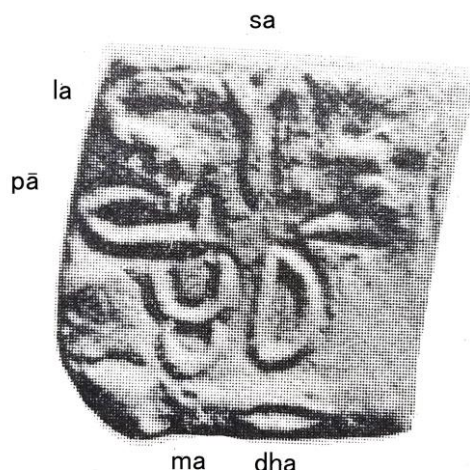


図 3 銘文 dhamapālasa のある貨幣(Allan1936 による)

方形の貨幣であるが、銘文の文字は貨幣の中心の回りに円を描くように、外側から内側を

見るように時計回りにならんでいる。下の文字 dha から始まり右から左に dhamapālasa とあり、左から右という通常の書写の方向とは異なる³。この貨幣の文字の字形は、辛島昇・熊本裕・山崎元一・吉田豊(2001)の表2によるとアショーカ王碑文の文字と類似している。画像へのローマ字の添付は吉池による。

Allan(1936)は初頭に「Eran」「Dharmapāla」「Third Century B. C.」と記すわけであるが、「Eran」については「Eran, now a village in the Saugor district of the Central Provinces at the confluence of the rivers Bina and Reutā, was in ancient times a place of great importance.」(Introduction の 90(xc)頁)とあるので国名もしくは地名とみていることがわかる。銘文の「Dhamapālasa」については特段の記載はないので、それが何を示すかについては別の観点から推測しなければならない。貨幣が発行された時代「Third Century B. C.」については「The site of Eran also yielded the earliest inscribed Indian coin—that of Dharmapāla」(Introduction の 91 頁(xci))とあるので、インド貨幣の最古の銘文との認識を持っているようである。

問題は銘文の Dhamapālasa であるが荻原雲来・辻直四郎(1979)のサンスクリット語によると Dharmapāla は「法の保護者」「Daśaratha 王の大臣、その他諸人の名」とある。pāla は「監視人、保護者；牧者：大地の守護者、主、王」とある。Dharmapāla は王名もしくは人名である可能性が高い。そうであるならば dhamapālasa は属格語尾-(a)sa が付されたもので王名・人名の属格形と見てよさそうである。後続成分が無く王名属格で終了する形式の銘文である。

②ブラーフミー文字インド語で Kaḍasa とある貨幣

貨幣の画像は末尾にある「PLATES」の 19(XIX)頁の 15 に収められている。



³ ブラーフミー文字の書写の方向について辛島昇・熊本裕・山崎元一・吉田豊(2001)には次のようにある。「セム系文字の右から左に対し、ブラーフミー文字は左から右に書かれる。もっとも、いくつかの刻文では右から左の例も見られ、それをもとに、ビューラーはブラーフミー文字は元来右から左に書かれていたことを示唆し、また、ディリンジャー(D. Diringer)は左右交替の牛耕式(βουστροφηδον ブーストロフェードン)の存在を述べている。しかし、現存の刻文から判断する限り、左→右の書き方は、ごく初期から確立されていたように思われる。」(852 頁)。

図4 銘文 Kāḍasa のある貨幣(Allan1936 による)

円形の貨幣の中央に半円と点のマーク、それと上部に波のようなマークがある。銘文は下側にある。文字は貨幣の外側から内側を見るように k̄a から始まり左から右に 3 字並び k̄aḍasa とある。左→右という通常の書写方向である。なお、ローマ字翻字は貨幣画像の中に記した。これは吉池による。

Allan(1936)によると「The very rude cast copper coins bearing a legend Kāḍasa in early Brāhmī characters, probably of the latter half of the third century or early second B.C., have not yet been attributed.」(Introduction の 92 頁(xcii)) とある。紀元前 3 世紀後半もしくは紀元前 2 世紀初めの貨幣とみているようだ。「The legend is the genitive of Kāḍa which it has been suggested might be for a Sanskrit Kāla. Cunningham suggested Kāḍa= Kādrava, the descendant of Kadru. It is probably a tribal name and not that of a ruler; the number of varieties also suggests this.」(Introduction の 同頁) とある。k̄aḍasa を、統治者ではなく部族名 k̄aḍa の属格形とみているようである。後続成分が無く王名属格で終了する形式の銘文である。

③ブラーフミー文字インド語で Gomitasa、rāṇāyā とある貨幣

貨幣の画像は末尾にある「PLATES」の 24(XXIV) 頁の 21 に収められている。方形の貨幣で上側に Gomitasa、下側に rāṇāyā もしくは rāṇāye (もしくは-yārāṇāyām?とする) とある。ローマ字の添付は吉池による。画像は不明瞭であり、吉池が付したローマ字と文字との対応が心許ないが、銘文自体の読みは Cunningham 氏と Allan 氏の読みをほぼ祖述したものである。上の銘文は貨幣の内側から外側を見るように並んでいる。go より始まり左から右に gomitasa とある。下の銘文は貨幣の外側から内側を見るように並んでいる。Rā より始まり左から右に rāṇāyā もしくは rāṇāye とある。二行の銘文である。上の銘文も下の銘文も左→右という通常の書写方向である。

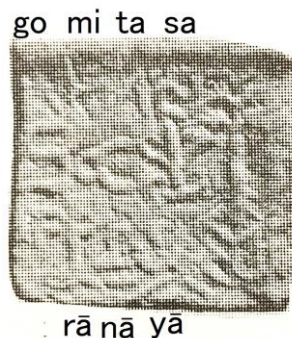


図5 銘文 Gomitasa のある貨幣(Allan1936 による)

Allan(1936)は初頭に「Mathura」「Late Third Century B.C.」「Gomitra」と記す。Mathura

については「The coins from the site and region of the ancient city of Mathura, ‘one of the most prolific fields in Northern India’」(Introduction の 108 頁(cviii)) とあるので北インドの都市名のようなものである。問題は Gomitra である。「Unlike any of the later coins which bear a name with or without regal title, they bear in addition to the name Gomitra (Gomitasa), an additional word which, since Cunningham’s time, has been read Bārānāye. Cunningham obtained these coins at Bulandshahr. The reading, however, is very doubtful.」(同 108 頁)「I now think it most probable that the legend begins with the syllable rā and reads rānāyā or rānāye.」(同 108 頁) とある。カニンガム氏 (Alexander Cunningham) は Gomitra を統治者名とし、追加の語を Bārānāye と読むようである。なお追加の語があるのは、初期の古い貨幣であり、後期の貨幣には無い。Allan (1936) は、追加の語を Bārānāye ではなく、rānāyā もしくは rānāye と読む。T. W. Rhys Davids, William Stede (1921-35:579) のパーリ語は rājā (rājan) を王とし、その単数属格として rañño, rājino を挙げる。また、具格として rañña、処格として rañne を挙げる。Allan の rānāyā, rānāye は、あるいは rājā (rājan) の属格・具格・処格と何らかの関係があるのかもしれない。いずれにしても Gomitra は王名で、銘文の Gomitasa は王名の属格とみることができる。下の銘文の読みが確定するまでは確かなことは言えないが、後続成分が無く王名属格で終了する形式の銘文のようである。

4. インド貨幣の王名・部族名の属格

Allan (1936) の貨幣のカタログと解説によると、紀元前 300 年から紀元前 201 年までの 100 年間のいずれかの時期にインドに於いて、後続成分の無い王名・部族名の属格で終了する銘文を持つ貨幣が発行されたことになる。それがインド独自のものであるか、それともギリシア様式の影響によるものか問題となる。

後続成分の無い王名属格で終了する銘文を持つギリシア様式の貨幣はアレクサンドロスの東征とともにヘレニズム世界に広がった。アレクサンドロスの没 (前 323 年) 後、帝国はマケドニアのカッサンドロス朝、トラキアと小アジアのリュシマコス朝、エジプトのプトレマイオス朝、シリアとそれ以东のセレウコス朝によって分割統治された。その後マケドニアにはアンティゴノス=ゴナタスによりアンティゴノス朝が成立した⁴。各朝において、後続成分がなく王名属格で終了するギリシア文字ギリシア語の貨幣銘文が使用された。諸王はアレクサンドロスの後継を任ずるわけであるから、この文字と言語の使用、および後続成分の無い王名属格で終了するという様式の使用は順当である。具体例は注に示した⁵。

⁴ 秀村欣二・伊藤貞夫 (1976) 参照。

⁵ Sear, D. R. (1979) によりヘレニズム期の貨幣銘文をみると次のとおり。カッサンドロス: kassandroy カッサンドロスの (No.6753)。リュシマコス: basileōs lysimakhoy 王リュシマコスの (No.6810)。プトレマイオス I: ptolemaioy basileōs 王プトレマイオスの (No.7758)。セレウコス I: basileōs seleukhoy 王セレウコスの (No.6846)。アンティゴノス=ゴナタス: basileōs antigonoy 王アンティゴノスの (No.6846)。

その後五つの王朝のうち、小アジアからインダス川まで領有する東方のセレウコス朝から二つの王国が独立した。イラン系のパルティア王国と、その東側のギリシア系のバクトリア王国である。パルティア王国の初代王アルサケス(前 238 年-前 211 年)もバクトリア王国の初代王ディオドトス I 世(前 256 年-前 248 年)も、後続成分が無く王名属格で終了するギリシア文字ギリシア語の銘文を使用した。

アレクサンドロスの東征および帝国の分割統治がなされた紀元前 3 世紀に、後続成分が無く王名属格で終了する銘文の使用というギリシア様式が、インド貨幣に影響を与えたかどうかという問題である。時期的には不可能ではないが、インドはアレクサンドロスにとって、これから侵略しようとする対象である。特段の論拠がない限りは貨幣に於ける影響を議論するのは難しい。ギリシアとインドとの直接の関係はバクトリア王国に至って起こる。バクトリア王国はアレクサンドロスの死後その東征軍がおこしたギリシア人王の国でありウズベキスタンの東南部に故地がある。この王国では後続成分が無く王名属格で終了するギリシア文字・ギリシア語の銘文を持つ貨幣が先ず発行され、その後デメトリオス I 世(前 200-前 185)のときにインド西北に侵出し、本格的にインドの文化との接触があった。そのときには、既にインドではブラーフミー文字インド語による後続成分が無く王名・部族名の属格で終了する銘文を持つ貨幣が発行されていたのである。

以上を鑑みるならば、王名・部族名の属格の銘文を持つインド貨幣は、ギリシア貨幣の王名の属格とは独立してあったと見た方が自然である。

5. ギリシア貨幣とインド貨幣の王名属格の相異

古代ギリシアのアルカイック期と古典期の貨幣の、後続成分が無く王名属格で終了する銘文は、ふつう「～の」と直訳される。場合によっては“貨幣”を付して「～の(貨幣)」とする。しかし後続する名詞成分が無く王名属格で終了する語の本来の意味について、中村雅之(2019)に興味深い仮説があり、吉池孝一(2025)はその仮説を補強した。古代ギリシアのアルカイック期における器物に記された「人名属格+第一人称単数動詞 emi/eimi (私は～である)」は器物自身が語る形式で「私は～のもの」を意味する。アルカイック期の動詞 emi/eimi のない「人名属格」のみの形式も、同類貨幣の銘文の違いを比較することにより、器物自身が語る形式の省略形と見なし得る。後代の古典期以降の貨幣に記された後続成分が無く王名属格で終了する語はアルカイック期の器物が語る用法の名残りというわけである。もっともこの仮説は現在のところ一般に認められているものではなく、多くの研究者はアルカイック期の「人名属格」も古典期の「王名属格」も、ともに「～の」と直訳して済ませている。

それに対して、インド貨幣の、後続成分が無く王名属格で終了する語については、所属・所有の「～の」とみる以外の用法を寡聞にして知らない。ギリシア系のバクトリア王はインド西北に侵出しインド文化との接触がおこると、表面にギリシア語、裏面にインド語という二言語併用貨幣を発行した。両言語の内容はほぼ同じで、ギリシア語の銘文をインド

語に翻訳したものとなっている。両言語ともに、後続成分が無く王名属格で終了するという形式が同じため、ギリシア語の王名属格のインド語への翻訳に於いてインド側の抵抗感はないであろう。もっとも、王名属格で「私は～のもの」を意味する用法がギリシアにおいて「いつまで有効であったか」不明である。不明ではあるが、支配者のインド・ギリク朝（バクトリア王国のギリシア人勢力がインド西北に侵出して以降このように呼ぶ場合がある）のギリシア人と、被支配者のインド人の王名属格に対する理解は異なっていた可能性はある。王名属格をギリシア風に理解するかインド風に理解するかそのいずれにしても銘文の形式の上では問題はなく王名属格の後に他の語は不要である。しかし、王名属格がギリシア語やインド語以外の言語に持ち込まれた場合、王名属格の後に他の語が用いられる場合がある。次にそのようなソグド語とモンゴル語の貨幣の例を確認する。

6. 「王名属格+貨幣」とあるソグドの銅銭

セミレチエ(天山山脈の北、バルハシ湖の南)と称される地域のソグド銭を確認する。その形態は方孔円形で製造法は鑄造であるから中国の貨幣様式によっている。Камышев(2002)によると紀元後 8 紀前半のものという。銘文のローマ字翻字及びその意味は Камышев(2002)に依る。摩滅等により確認できない部分は Камышев(2002)に掲載された他の貨幣により[]を付して復元する。図 6 の画像に対するローマ字の添付は吉池による。

^{オキテ}
表面 方孔の周囲に一行のソグド文字・ソグド語がある。銘文は貨幣の内から外をみるようにならんでいる。8 時の位置より反時計回りに xwt' w(王)、w['xswt'wy](ヴァクシュタヴの。王名属格)、pny(貨幣)とある。王名属格に相当する格語尾の部分は摩滅で見えない。あわせて「王ヴァクシュタヴの貨幣」となる。xwt'w(王)と pny(貨幣)は、吉田 豊(2022)に添付された語彙表にもみえる。



表



裏

図 6 クセミレチエのソグド銭（古代文字資料館所蔵）

裏面 上および左にセミレチエのタムガ(シンボルマーク)がある。下に漢字・漢語の「元」がある。この「元」は、おそらく唐代に発行された開元通寶の「元(始まり、根源)」に相当するものであろうが言語として扱われているかどうかは不明である。あるいは中国を表すタムガとしてセミレチエのタムガとともに裏面に記されている可能性もある。

形態と製造法は中国の貨幣様式である。裏面のタムガと漢字の配置は、上下左右に文字を配する中国銭の様式を受け継いでいる。しかしながら、表面の銘文は、中国の伝統とは相容れない。王名属格を含むところはアレクサンドロスからクシャン朝に繋がるギリシア様式の貨幣とインド様式の貨幣を髣髴とさせるが、ギリシア語やインド語のように後続する成分が無く王名属格で終わることではない。「ヴァクシュタヴの貨幣」のように王名属格であることが想定される語の後に「pny 貨幣」が付されている。ギリシア語やインド語の王名属格で終了する形式は、セミレチエのソグド貨幣が仮にギリシア様式の影響を受けていたとしても、ギリシア語やインド語を第一言語としない民族にとって、後続成分が無く王名属格で終了する形式には、不安を覚えるものがあつたと想像する。「pny 貨幣」を付加して「ヴァクシュタヴの貨幣」とすることは、ソグド人にとっては無理のない銘文であるかもしれない。セミレチエの貨幣の推定発行年は、ギリシア様式の貨幣が行われた時代から離れている。地域も離れている。時代も地域も離れているが、「pny 貨幣」が後続するソグド語の王名属格の銘文は“間接的” にギリシア様式の影響を受けていると想像している。

7. 「王名属格+打たせたる」とあるモンゴル帝国イルハン国の貨幣

モンゴル帝国のイルハン国は 13 世紀中頃から 14 世紀にイラン方面に栄えた国である。インド西北、古バクトリアを含む地域に位置する。ここに紹介する銀貨は、第 4 代アルグン(在位 1284-1291 年)の発行したものである⁶。金型を用いて打刻したギリシア様式の円形の銀貨である。画像は銘文を明瞭にするためやや傾けた(図 7)。



表



裏

図 7 イルハン国の貨幣(古代文字資料館所蔵)

⁶ 在位年はモーガン著・杉山訳(1993)による。

表面 ^{オヘテ} 縦書きで左から右にモンゴル文字モンゴル語で qayan-u(カーンの)、nereber(名において)、argun-u(アルグンの)、deledkegölüg-sen(打たせたる)とある⁷。-sen は上部に横書きされている。なおモンゴル文字の左側に「☆」が付されている。この☆はモンゴル文字のγや n を明示する点の代用である⁸。あわせて「カーンの名においてアルグンの打たせたる」とある。

裏面 ^{ウラ} アラビア文字の正方形の部分⁹は定型のシャハーダ(信仰告白)のようである。

問題は表面のモンゴル文字モンゴル語である。王名の属格が含まれるが「アルグンの打たせたる」とある。「打たせたる」で貨幣の打刻を示すので「貨幣」を補足し「アルグンの打たせた貨幣」とみることができる。ギリシア語やインド語は後続成分が無い王名属格で終了し得る。イルハン国の貨幣が仮にギリシア様式の影響を受けていたとしても、ギリシア語を第一言語としない民族にとって王名属格で終了する形式は不安を覚えるものであったと想像する。この点は先に見たソグド銭で「ヴァクシュタヴの貨幣」のように王名属格に「貨幣」を後続させる用法と類似している。イルハン国はギリシア様式が行われた時代から離れているが、かつて王名属格が行われていた地域を含む。これをどのように理解するか難しい。時代は離れているが、かつて王名属格が行われていた地域を含むことを考慮して、“間接的” にギリシア様式の影響を受けていると想定しても大過は無いかもしれない。

6. おわりに：二言語併用貨幣出現の経緯

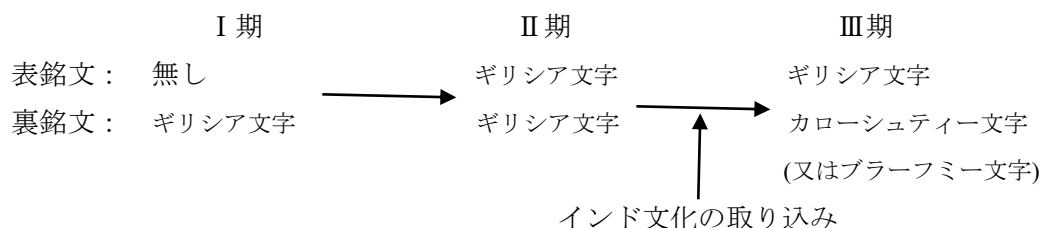
バクトリア王国(所謂グレコ・バクトリア朝と、インド西北に侵出したインド・グreek朝)の貨幣を年代順に並べると興味深い点が浮かび上がってくる。貨幣の銘文が、①一言語(ギリシア語)で裏面にある、②一言語(ギリシア語)で表面と裏面にある、③二言語(ギリシア語とインド語)で表面と裏面にある(二言語併用)、ということが、①→②→③のように時間の経過とともに起こっている。①の貨幣銘文がギリシア貨幣の通常の在り方で、②のように同一言語の貨幣銘文が両面にあることはめずらしい。③のように、異なる言語の銘文が両面にある二言語併用貨幣に至っては、インド・グreek朝以前には絶無である。二言語併用貨幣の出現は新文化の創出と言っても言い過ぎではないかもしれない。それでは新文化創出の経緯はどのようなものであったか。

インド西北に侵出したギリシア人支配者はデメトリオス I 世(前 200-前 185 年)である。その子の世代、すなわち、パンタレオン(前 185-前 175 年)、アガトクレス(前 180-前 165 年)、デメトリオス II 世(前 180-前 165 年)から、③の二言語併用貨幣は現れるわけであるが、それと前後して、アンティマコス I 世(前 190-前 180 年)、アガトクレス(前 180-前 165 年)、エウクラティデス I 世(前 171-前 155 年)が②のギリシア語を両面に書く貨幣を発行してい

⁷ 中村雅之(2005)参照。

⁸ この事は研究会に於ける栗林均氏の指摘による。

る⁹。この②が、③という新たな形式の‘呼び水’となったと私は想定している。当時インド側では一言語（ブラーフミー文字インド語）の修飾成分が無く王名属格で終わる銘文の貨幣が既に発行されていたから、②の両面にあるギリシア文字ギリシア語の一方をブラーフミー文字インド語もしくはカローシュティー文字インド語（プラークリット語）に入れ替えれば二言語併用貨幣ができる。一言語片面、一言語両面、二言語両面（二言語併用貨幣）の時間上の分布を勘案し、二言語併用貨幣が出現した経緯は次のようであったと想定する。



II期とIII期の間に‘インド文化の取り込み’と書いたが、問題は、インド文化の取り込みの結果、なぜ両面にギリシア語の銘文があったものの一方をインド語に入れ替えたかという点にある。別の言い方をすると、ギリシア人王とその勢力は、なぜ自分たちの貨幣にインド語の銘文を取り込んだかということである。

このことについて中村元・早島鏡正訳(1963)『ミリンダ王の問い』にはつぎのようにある。

「バクトリアにおいては貨幣の様式は純ギリシア的であり、純粋にギリシアの重量基準に従って鑄造された。バクトリアの一般人民は征服者の技術に何らかの影響を及ぼし得るほどの進歩した文明をもっていなかったのである。ところがギリシア人がインド文化圏の内にはいると、多くの点で自分の文明と同様に進歩した古い文明に接触したので、そこで妥協融合を行なう必要が生じた。貨幣も、征服者のみならず被征服者

⁹ 一言語両面貨幣はどのようにできたか。王自身の他に、父母・祖父・王国の創始者など関連の深い第三者に言及するばあい使用される。いま参考までに 2 例のみであるが、その銘文をあげると次のとおりである。

・アンティマコス I 世【128】

表銘文：ΔΙΟΔΟΤΟΥ ΣΩΤΗΡΟΣ 救済者ディオドトス(バクトリア王国の創始者)の

裏銘文：ΒΑΣΙΛΕΥΟΝΤΟΣ(領有するの分詞) ΘΕΟΥ ANTIMAXΟΥ 神たる領有者アンティマコスの

・アンティマコス I 世【129】

表銘文：ΕΥΘΥΔΗΜΟΥ ΘΕΟΥ 神たるエウテュデモスの(ディオドトス配下の有力な太守の一人)

裏銘文：ΒΑΣΙΛΕΥΟΝΤΟΣ ΘΕΟΥ ANTIMAXΟΥ 神たる領有者アンティマコスの

多めの銘文を無理なく記すためには面積が必要であり、それを契機として両面に記すこととなったのであろう。

の必要にも応じたものでなければならなかった。バクトリアの貨幣はギリシア語のみを用いていたが、インドで発行した貨幣には、表にギリシア文字を刻し、裏にはそれをインド語に翻訳したものを、インド文字で刻出した。」(339 頁)

インド西北に侵出したギリシア人勢力は自分たちと同等かあるいはそれ以上の文化に触れることにより、自分たちの文化に対して持っていた規範意識がゆるみ、異文化を受け入れる態勢ができたのであろう。デメトリオス I 世(前 200-前 185 年)」はヒンドークシュ山脈を越えインド西北に侵出した初めての王とされる。二言語併用貨幣こそ発行しなかったが、貨幣のオモテの図像に「王の頭像(象の被り物)」がある。この‘象の被り物’は躊躇なくインド文化を取り入れたことを示すものであろう。デメトリオス I 世の子の代より二言語併用貨幣が現れるわけであるが、この二言語併用の出現について、中村元・早島鏡正(1963)は「貨幣も、征服者のみならず被征服者の必要にも応じたものでなければならなかった。」とする。「インド人の必要に応じた」とまで言い得るかどうか不安を覚える。征服者であるギリシア人がインドを征服する道具として二言語併用貨幣を利用したという面もあると思う。ガンダーラの西南方に位置するカンダハルから 1958 年アショーカ王碑文が発見された。これはギリシア文字・ギリシア語とアラム文字・アラム語という新旧の共通語(リンガフランカ)により法勅を併記した碑文である。アショーカ王碑文の建立は、ちょうどバクトリア王国の創始者であるディオドトス 1 世(前 256 年-前 248 年)の頃に相当する。二言語併用貨幣の出現はパンタレオン(前 185-前 175 年)以降であるから時期からみて、インド西北の地に二言語を併記した碑文が建立されていたことは、二言語併用貨幣の出現と無関係ではないであろう。二言語を併用した形式の貨幣はアショーカ王碑文を模したものであるとしてインドの上層部の人々にとって受け入れやすいものであったと想像する。インド側にもブラーフミー文字インド語の王名の属格で終わる銘文があったことも、ギリシア人のギリシア語とインド語の王名属格で終わる銘文を持つ貨幣を受け入れやすいものとしたであろう。

【参考文献(発行年順)】

- T. W. Rhys Davids, W. Stede(1921-35:579) *Pali-English Dictionary*, PTS. London.
- John Allan(1936) *Catalogue of the Coins of Ancient India*. The British Museum, London. First Indian Edition 1975. By Oriental Books Reprint Corporation.
- H. G. Liddell & R. Scott(1961) *A Greek-English Lexicon*, A new ed. rev. and augm. throughout by Sir Henry Stuart Jones, with the assistance of Roderick McKenzie and with the co-operation of many scholars. Clarendon Press.
- 中村元・早島鏡正(1963) (1964) 『ミリンダ王の問い』(東洋文庫) 第1, 2, 3巻, 平凡社。
- 田中美知太郎・松平千秋(1970) 『ギリシア語入門 改訂版』岩波書店。もと 1951 年。

- Michael Mitchiner (1975) *Indo-Greek and Indo-Scythian coinage*, Volume I, II, III.
London : Hawkins Publications.
- Michael Mitchiner (1976) *Indo-Greek and Indo-Scythian coinage*, Volume V, VI, VII.
London : Hawkins Publications.
- 秀村欣二・伊藤貞夫(1976)『世界の歴史 第2巻 ギリシアとヘレニズム』講談社。
- Sear, D. R. (1978, 1979) *Greek Coins and Their Values*. Volume 1: Europe (1978), Seaby, London, Reprinted 2002. Volume 2: Asia and Africa (1979), Spink, London, Reprinted 2017. VOL. 1 は 2002 年版、VOL. 2 は 2017 年版による。
- 荻原雲来・辻直四郎(1979)『漢訳対照 梵和大辞典』新文豊出版公司、1979 年影印。
- J. ゴンダ著・辻直四郎校閲・鎧淳訳(1984)『サンスクリット語初等文法』春秋社。もと 1974 年。
- デイヴィド・モーガン著 杉山正明、大島淳子訳(1993)『モンゴル帝国の歴史』角川選書。
- 水野弘元(1994)『パーリ語辞典〈二訂版〉』春秋社。
- 山崎元一(1997)『世界の歴史3 古代インドの文明と社会』中央公論社。
- Glass, A. (2000) *A Preliminary Study of Kharoṣṭhī Manuscript Paleography*.
web上に公開されたものによる。
http://depts.washington.edu/ebmp/downloads/Glass_2000.pdf
- 辛島昇・熊本裕・山崎元一・吉田豊(2001)「ブラーフミー文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂、851-875 頁。
- グプタ, P. L. 著/山崎元一他訳(2001)『インド貨幣史 一古代から現代まで』刀水書房。原本は 1969 年。
- 吉田 豊(2001)「バクトリア語」『言語学大辞典第3巻世界言語編(下-1)』三省堂、111-115 頁。
- A. Камышев(2002) *Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья*. Бишкек: РаритетИнфо.
- A. K. Narain (2003) *The Indo-Greeks: Revisited and Supplemented*. B. R. Publishing Corporation, Delhi, 4th repr. with suppl. もと 1957 年。
- 平野伸二(2003)「古代インドの打刻印貨幣と土着の貨幣 ―ブッダの時代から3世紀頃まで―」『収集』2003 年3月号、10-17 頁。
- 中村雅之(2004a)「インドグreek貨幣の銘文――アポロドトス I 世の方形銅貨」『KOTONOHA』第21号(2004 年8月)、1-3 頁。
- 中村雅之(2004b)「カローシュティー文字貨幣3種」『KOTONOHA』第22号(2004 年9月)、1-3 頁。
- 中村雅之(2005)「イル・ハン朝の二言語貨幣初探」『KOTONOHA』第34号(2005 年9月)、1-4 頁。
- 吉池孝一(2014a)「二言語併用貨幣 ―セミレチエのソグド銭―」『KOTONOHA』143 号(2014 年10月)、3-4 頁。
- 吉池孝一(2014b)「二言語併用貨幣 ―イル・ハン国第4代アルゲン発行の銀貨―」『KOTONOHA』

- 第145号（2021年12月）、1-2頁。
- 前田耕作(2019)『バクトリア王国の興亡 ―ヘレニズムと仏教の交流の原点―』ちくま学芸文庫。もと前田耕作(1992)『バクトリア王国の興亡』（レグレス文庫）第三文明社。
- 中村雅之(2019)「ヘレニズム貨幣における王名の属格に関する覚書」『KOTONOHA』第 201 号（2019 年 8 月）、20-21 頁。
- Wolfgang Fischer-Bossert (2020) “Phanes: A Die Study”【パネース：金型の研究】，*The American Numismatic Society* pp. 423-476.
- 吉田 豊(2022)『ソグド語文法講義』臨川書店。2024 年初版第 2 刷による。
- 吉池孝一(2025a)「古代ギリシアのパネースのコイン―王名属格の源流―」『KOTONOHA』第 268 号（2025 年 3 月）、1-13 頁。
- 吉池孝一(2025b)「バクトリア王国における二言語併用貨幣の出現と伝播―インド・ギリク朝からインド・スキタイ王国、クシャン朝まで―」『KOTONOHA』第 272 号（2025 年 7 月）、1-23 頁。
- 吉池孝一(2025c)「バクトリア王国における二言語併用貨幣の出現と伝播―インド・ギリク朝からインド・スキタイ王国、クシャン朝まで―」『KOTONOHA』第 272 号（2025 年 7 月）、1-23 頁。